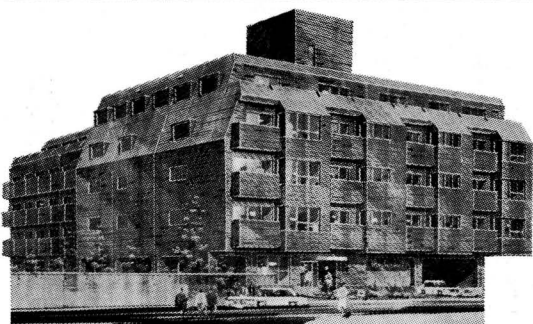
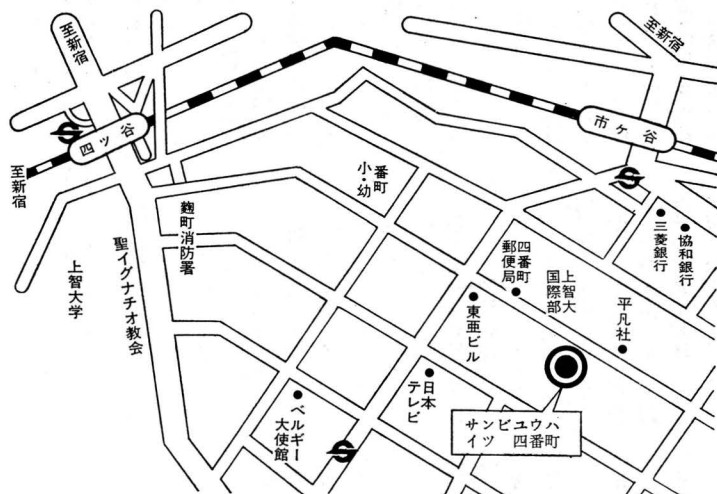


新しい年は新しいルームから

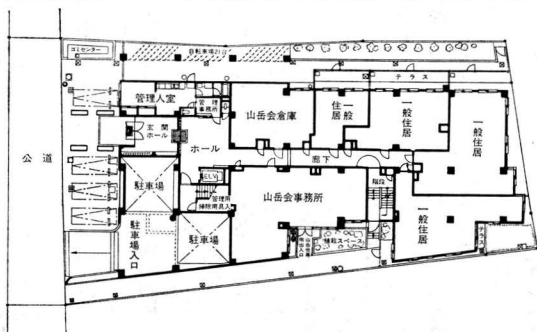
—山岳会本部1月29日に移転—



△交通▽国電・地下鉄有楽町線市
ガ谷駅下車徒歩約7分または地下
鉄有楽町線麹町下車徒歩約6分
△番地▽東京都千代田区四番町五
―四サンビュウハイツ1階―
〒102

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

す。別途ご案内申し上げます。



移転にともなう諸作業のため、しばらく会の事務・行事等にご不便をおかけいたしますが、ご諒承ください。なお、3月4日新ルームの披露パーティを予定しています。別途ご案内申し上げます。

新ルームでは、図書室の整備・充実をはかり、内外の山岳関係図書を収蔵、名実ともに日本の代表的なアルパイン・ライブラリーとするとともに、各種行事、集会等にも積極的にご利用いただけるようになります。



昭和53年(1978年)

1月号(No. 391)

社団法人 日本山岳会
(J.A.C.)

定価一部 150円

目次

- 新しい年は新しいルームから
—山岳会本部1月29日に移転— ……(1)
新名誉会員に今西錦司、吉沢一郎
両氏 —昭和52年度年次晩餐会—
……………(2)
中国登山界の沿革と現状(中)
(片山全平) ……(2)
1977年カラコロムの日本隊
(広島三朗) ……(4)
ガルワール通信(原 真) ……(5)
図書紹介 ……(5)
登山の技術(上, 下巻)
ナンダ・デヴィ縦走
集会「写真講習会」参加記
(松丸秀夫) ……(7)
ルーム基金応募者ご芳名(6) ……(7)
自然保護情報
山は山でもゴミの山
—山のゴミ公害について—
(坂倉登喜子) ……(8)
報告とお知らせ ……(9)
1978年度パミール及びカフカス
入山要領 ……(10)
会務報告 ……(9)
ルーム日誌・会員動向 ……(11)
カット/松本慎太郎, 谷アユ子

かねてご案内のとおり、日本山岳会は、東京麹町に新ルームを購入、その完成を待って、いよいよ一月下旬に移転作業をおこない、二月から、すべての業務は新しいルームでおこなわれます。

御茶ノ水にあった自前のルームを体協の移転にもなって手離して以来長い間借り住いをつづけてきましたが、高騰する家賃が会の経理を圧迫し、ひいては会費の値上げ等、会員各位の負担増につながることを考慮して新ルームの購入を決定したことは、会員各位にすでにお伝えしたとおりであります。高額な購入資金も、会員各位の熱烈なご支持を得て所期の目標額を大幅に達成することができました。

新名誉会員に

今西錦司、吉沢一郎両氏

—昭和52年度年次晩餐会—

恒例の昭和五十二年年度年次晩餐会は十二月三日(土)、東京・京王プラザホテルで二八三名の出席者を得て開かれ、現在進行中の新ルーム募金活動の現状、西堀会長の中国訪問の報告などがあった。

(司会者は宮下秀樹氏)。
今年の物故者は十五人(別掲)、出席者一同黙祷を捧げたのち、西堀会長の挨拶に移った。

新ルームの募金状況は、九百二十四人、千四百八十三万五千円が寄せられており、明年一月中旬から移転を開始、末日までには開館の予定である。これまでの絶大な協力を感謝すると同時に今後の法人関係を含めると、目的達成の見

通しのついたことが明らかにされた。

このあと、同会長の訪中報告(前号掲載)、また日本山岳会、日本ネパール協会共催のネパール相クリシュナ・ラジ・アリアル氏歓迎レセプション開催(十二月十六日)の件が発表された。

今年度、名誉会員に推挙されたのは今西錦司前会長、吉沢一郎元副会長の二氏、また永年会員は後藤幹次、武村市太郎、藤島玄、笠原潤二郎、角田吉夫、津田周二、大沢伊三郎の七氏で両会員を代表した三氏の挨拶があり(別掲)、榎有恒氏の音頭で乾杯、師走の一夜の歓談は尽きなかった。



西堀会長(右)から名誉会員証を受ける今西錦司氏(左)

今西名誉会員の

話 私は京都人

で西堀会長とは中学の同級生でありま

す。当時京都の山に登る人はいなか

ったのですが、わ

れわれが発案して

「山城三十山」と

いうものを設定、ホームグラウンド

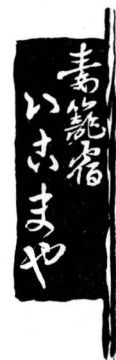
中国登山界の沿革と現状(中)

片山全平

政治的、社会的激動のなかで、中国登山界が揺籃期を経て絶え間ない発展を遂げたのは、北京地質学院(Peking Geological Institute)を拠点としたことにあると思う。登山による学生の体力増強(毛首席は知育体を目指した)と、もう一つには登山を学術調査という実利面の推進と併行し得たからで、他のスポーツのように文革にまどわされることが比較的少なかったのではないかと考えられる。

同学院には一九五八年登山が導入された。そして、その年の十二月、五十四人の大部隊(十二人は女性)で「七・一」氷川主峰へ、翌年には太白山に全員登頂を行っており、これらの登山は同学院が主体となつて行われた。また同じ一九五九年ムスタグ・アタに登っているが、十人の登頂者のうち四人(王富洲、Shin Ching, Chun Chen, Wang Kuei Hua)が北京地質学院OBであり、このうちChunとWangは女性の世界高度登頂記録(従来はコガン夫人のジュガル・ヒマール)を更新した。さらに一九六〇年には、エベレストに八人の同学院生(OBも含む)を送っているが、王富洲はそのときの登頂メンバーの一人であった(彼は一九七五年の第二次隊にも参加、指揮を取っている)。

この第一次エベレスト登山と同じ時期に「幻の山」アムネ・マチン(阿尼馬琴峰)積石山、七一九〇メートル、N34度50分、E99度10分、アルパイン・ジャーナルにはN34度30分、E99



カット/松本慎太郎

度30分、青海省)に同学院単独で登山隊を送り、八人が六月二日午後一時二十分(北京時間。以後時間はいずれも北京時間で、現地時間とは約二時間半の開きがある)、初登頂に成功した。同隊は五月八日西寧をトラックを連れねて出発、途中、Machenで地方ガイドと西藏語の通訳をとめない、四十頭のヤクに三トンの資料を積んで六日間のキャラバンでBC(四九五〇メートル)に達した。戦後の一九四九年、西側から初めてこの山域に入った米人レナード・フランシス・クラークの探査当時とは大変な隔りがある(その著書は「The Marching Wind」邦訳「アムネ・マチン」水谷準訳)。もちろん、ペレイラ將軍、ロック博士らの推定した高度はくつがえされたばかりか、同隊の科学的調査は五百キロにわたる広域に達し、そのアプローチのなかに六千メートル級のピーク十四座が確認されるなど、五万分の一の地図も作製された。北京地質学院の、突然湧いたような登高欲、遠征熱はどうしてもたらされたのか。

「登山と地理学との関連を認識した同学院共產党支部の強力なテコ入れ」によるもので、単に遠征隊の組織作りだけでなく、日常の登山活動として、体育正課に組み込み、体育教師と近郊の山で登山技術のトレーニングにも励んでいた。「発足三年間にして、学内六五〇〇人の学生登山家を擁するまでになったが、これは全学生の98パーセントである」と、China's Sports(一九六一年)に述べている。また当時、登山

などところがあるだろうかと、憧れといえますが好奇心をそそられながら少年時代を過しました。

その後、ヒマラヤ、樺太、満蒙の探検に行ったのですが、北山で勉強したのとして、登山と探検は合わせて一つ、ルーツは同じではないかと思っています。

そしていま、中学時代を思い出し、登っていない山に登っていますが、現在九百五十座になり、このうち一等三角点は二百五十座となりました。来年は千になります。これで止めようとは思っていません。へたるまで登り続ける所存でございます。御支援お願いいたします。ありがとうござい

ます。

吉沢名誉会員の話 榎、早川両大先輩からみれば小僧ツ子に等しいような私が名誉会員にしていただき、びっくりされたことと思っております。藤島敏男さんは「山に忘れたパイプ」を書いておられますが、あの世に行かれた藤島敏男さんと同じように、どうやら私も棚上げされてしまいました。これまでは世にはばかるようなことは言いませんでした。書きもしませんでした。書きからは、自由に、藤島さんを上回るような世にはばかり方をしていきたいと思っております。いずれにしろとんでもないものをいただきましたことは皆様の御支援によるものと思っております。ありがとうござい

ます。

藤島玄永年会員の話 このような会で一番思うことは、綺羅星のごとくおいでになる皆さんと、気楽に話し合い出来ることです。このことから思いまして、私の歩んだ道を申し上げます。

千台(会員番号)にならないうちに入ろうと思いましたが、会費が値上りし、また次の年も値上りしたので文句をいったところ、塚本繁松さん(故人)が「昨年の会費でいい」ということで入った。しかし当時は終身会員ということもあり、いま改めて永年会員に推され重籍を持つているわけです。

越後であるから、高頭さん(仁兵衛)、大平さん(最)とつながりがあるかと思われるでしょうが、故郷では高頭先生は大地主、大旦那でありますから手足のとどく存在ではなく、山行は一緒にできなかったのです。

皆様と顔を合わせるようになったのは戦後のお茶の水時代からです。当時塚本さんは戦災の跡にテントを張って本部の面倒を見られたのです。その塚本さんが終戦後わたしの家に滞在していたとき、越後支部設立に努力され、そして山形、福島にも呼びかけて作られることになりました。新潟鉄工の職員では山には登りますが、お付き合いはありません。横のつながりもありません。五十年間山登りの

活動に功績のあった人に贈られた「運動家健将」(マスター)は六人、「一級」が八人、「二級」二人、「三級」七十二人におよんでいる。登山は全校を席巻し、壁新聞にも登山は「一本のロープで結合された友情のきずな」と大書されていた。その後の同学院生の登山活動はいうまでもなく、ゴサインタン、第二次エベレスト登頂へとつながるのである。

女性解放は、一九四九年の解放後の中国の大きなテーマであった。その実績は「纏足」に象徴されるような、中国女性に対する時代的イメージを完全に払拭した。一九五八年の中ソ合同のレーニン峰登山に女性五人が初めて参加したのを皮切りに、五九年のムスタグ・アタに八人の女性参加、そして六一年、コングル九別山には女性独自の登山隊が組織された(袁揚登山隊長、当時二十六歳。西統(Shitah, 二十八歳)、潘多(Pandob, 二十三歳、第二次エベレスト登頂者)のチベット女性二人が七九五メートルの世界最高登頂記録を樹立した。

この登頂の帰途、西統が遭難死している。これは一九五七年の貢嘎山の遭難以来のものとなる。その追悼文とし、彼女の生涯が China's Sports に掲載されたが、そのまゝに同峰の登頂記は次のようなものであった。

六月十七日、午後一時二十分、七三〇メートルの最終キャンプをあとにしたのは、王義勤(副隊長、共産党隊支部書記、二十七歳)指揮のもと西統、潘多、查母金(二十三歳)の四人であった。午後四時、七四〇メートルの地点に達し、高度障害、零下二十度、深雪に悩まされ、前衛峰に達したのが九時三十分、視界は十二、三メートルとなり、王義勤、查母金が隊列から離れ、西統、潘多の二人が登高を続行、午

後十時半(北京時間)頂上に達した。しかしガスと強風で視界は零となり、雪洞を掘って七四〇メートルの地点でビバーク、翌朝、最終キャンプで王、查母金と合流した。その降下時に西統が遭難死した模様である(その詳細は不明)。

西統はラサの貧農の出身である。登山に関心があることを共産党に認められ一九五八年、他のチベット娘たちとともに登山技術の講習と党学習のため合宿に入り、九人は一人の教師につききりで日常生活からの教育を受けることになった。チベットのみじめな生活から一変、国家機関の教育を受けているわけだが、「毛首席の新時代の恩恵に浴して胸の詰まる思いだった」と述べている。

西統は一九五九年、男女合同の登山隊に加わり、潘多とともにムスタグ・アタの登頂に成功、「登山運動家健将」が贈られることになるが「それにふさわしい功績はしていない」と固辞したという彼女にまつわる美談もいまなお語り伝えられている。

現在中国女性登山界は袁揚、潘多が中心的役割を果たして、西堀会長も一夜歓談の機会を持たれた。袁揚は四十二歳、潘多は三十九歳のはずで女盛りというところであろう。これは中国の女性開放時における女性教育の一端を示すものである。開放直後の婚姻法には、その自由、一夫一妻、男女の権利の平等などがうたわれており、また婦人の社会的経済的地位の向上にとともに、「半辺天」という、天の半分を支えるという女性の自覚も、あらゆる分野に芽生え、その参加の気風は拡大化していった。

× × ×

年功を積んだわけですが、このよ
うなこと(永年会員)をしてもら
いますと、「もう止めレ」という
ことか、と思っております(笑)。
大変失礼いたしました。

(片山金平/写真・小倉厚)

▽物故者 山田多市、五十嵐寛、
近藤芳春、中原万次郎、沢田武志、
山田光男、加納一郎、斎藤直一、
保泉利喜之助、川崎吉蔵、岡本俊
彦、伊藤弥十郎、三好勝彦、安川
茂雄、小山千万樹
* 年次晩餐会欠席者からの近況通
信、晩餐会出席者名簿、「この一
本展」等は、次号以降でご紹介し
ます。

●新名誉会員紹介(望月達夫)

今西錦司氏

明治三十五年(一九〇二)京都
に生まれる。三高時代山岳部を創
立、京都大学時代にかけて剣岳源
治郎尾根初登、黒岳、赤牛岳、烏
帽子岳積雪期初登、剣岳チンネ北
壁初登、昭和七年一月富士山で初
めて極地法登山を試み、探検登山
に新分野を開拓。昭和十年以降
は、白頭山冬期初登をはじめとし
て、内蒙古、大興安嶺をしばしば探
検。昭和二十七年秋マナスルの登
路偵察。昭和三十年カラコルム探
検。わが国における登山と探検の
パイオニアの一人で、登山界に与
えた影響は大きい。理学博士。文
化功労者。

昭和四年(一九二九)三月本会

入会。会員番号一一一七。戦前か
ら理事、評議員として会務に尽く
し、昭和四十八年以降四年間第十
二代の本会々長をつとめた。

著書に『山岳省察』『山と探検』

『ヒマラヤを語る』『カラコルム』

『日本山岳研究』等多数があり
『今西錦司全集』全十巻にまとめ
られている。

吉沢一郎氏

明治三十六年(一九〇三)東京
に生まれる。東京商科大学山岳部
時代から日本アルプスを中心に活
躍(剣岳、東大谷初登等)。マッタ



カット/谷アユ子

ホルンの研究から欧米山岳の文
献的研究に入り、ついでヒマラヤ、
カラコルム、ヒンズークシユの文
献的研究を長年月にわたって精力
的に行なっている。昭和三十六年
(一九六一)一橋大学ペルー・ポ
リビア・アンデス登山隊長として
成果を挙げ、昭和五十二年(一九
七七)日山協K2登山隊の総指揮
としてバルトロ氷河に入る。現在
ヒンズークシユ・カラコルム会議
会議長。

大正十四年(一九二五)九月本
会入会。会員番号九三〇。戦前か
ら幹事、理事、評議員、副会長と

して多年会務に尽くした功績は大
きい。現在永年会員。英国山岳会、
アメリカ山岳会、ヒマラヤン・ク
ラブ会員。
著書に『登高記』『北の山・南

一九七七年カラコルムの日本隊

高所登山委員会

広 島 三 朗

の山」があり、他にヒマラヤ関係
の翻訳書が多数ある。またA・A・J
やA・Jに多年にわたり、日本から
の海外遠征資料を送付した地味な
努力は高く評価されよう。

一九七七年のカラコルムは、こ
れまでになく日本隊が成功をおさ
めた年であった。七隊のうち五隊
が登頂に成功し、そのうち三隊が
初登頂というのも、日本における
カラコルム研究が一段と成果を上
げていることを物語っている。登
山隊のリストアップという形で、
一九七七年のカラコルムの成果を
ふりかえってみよう。

三十二名、総指揮吉沢一郎、隊長
新貝勲、その他管理隊員四名、初登
頂のイタリア隊に次いで第二登。
▽ブロード・ピーク 八〇四七メ
ートル、愛知学院大学隊

▽K2 八六一メートル、日山
協隊
六月中旬にB・C建設、高度五
二〇〇メートル、その後、C6ま
で作り、八月四日に馬場口等五名
が第一次アタックするが、悪天の
ため引き返す。八月八日に重広
恒夫、中村省爾、高塚武由の三名
がC6から約十四時間かけて登頂
に成功、翌九日にも広島三朗、小
野寺正英、山本秀夫、アシュラフ
・アマンの四名が登頂、第四次ア
タックは悪天のため中止、一九五
四年のイタリア隊の初登頂と同じ
アブルツチ(東南)稜、登攀隊員

七月初旬にB・C建設、高度四
九〇〇メートル、ほぼ初登頂のオ
ーストリア隊と同じルートで、八
月八日、七五〇〇メートルのC4
から、午前二時三〇分辻美行(30)、
野呂和久(25)、尾崎隆(24)の三名
がアタックに出發、午前八時五〇
分に登頂に成功した。

B・C以上の物資の荷上げ量は
五〇〇キロ、八〇〇〇メートル峰
におけるライト・エクスぺディシ
ョンのスタイルを打ち出した登山
隊であるといえよう。

湯浅道男隊長(41)以下隊員十二
名、主峰はオーストリア隊に次い
で、二〇年ぶりの第二登。

▽プルボー・ブラック 七〇〇
メートル、鉄道同人隊、初登頂
六月中旬にフーシェ谷からチヨ
ゴリザ氷河に入り、高度四一五〇

メートルにB・C建設、チヨゴリ
ザ氷河を源頭にたどり、北西稜の
六四〇〇メートルにC4を建設
し、七月十四日、矢島満雄(32)、
小林三三(29)、中村哲雄(27)、安
治章一(25)の四名が登頂に成功、
七月二十二日に今度はC3、五八
九〇メートルから、成田博(28)、
大沢稔(30)、木田秋雄(25)がふた
たび登頂に成功した。計七名が登
頂したことになる。長い間の地道
な研究の成果による初登頂といえ
るだろう。

秋山宏明隊長(40)、宮原弘之副
隊長(34)以下隊員十一名。
▽ピアレ 六七九メートル、
愛媛カラコルム遠征隊、初登頂
バルトロ氷河のキャンピング地とし
て名高いウルドカスの対岸にそび
える山で、最初南面から登る予定
であったが、すさまじい岩壁で手
がつけられなかったため北面に回っ
て登頂をねらった。B・Cはバルト
ロ氷河の右岸、ムスターグ氷河の
出合付近、そしてムスターグ氷河
の上に、C1、C2と建設し、C
3を尾根上に作り、七月二十二日
に重松文剛(37)、木村其由(34)、
落合忠徳(28)、沢田幹央(28)の四
名が登頂、一日おいて二十四日に
青木正樹隊長(43)、岡田千歳(33)
の二人も登頂し、全員六名による
初登頂に成功した。

▽タフ・ルタム 六六一メートル
ル、大阪登攀クラブ、初登頂
ビアフオ氷河からスノーレーク

を越えて南タフルタム氷河の五〇九〇メートルに六月二十七日にベースキャンプを建設、六二〇〇メートルの南西岩稜上にC3を建設して七月十三日、小畑和人(26)、宇佐川幸夫(24)、田中義信(25)、光田和也(22)の四名が登頂、続いて十四日に宮川広年(31)、松村勝雄(29)、清水豊(25)、大西英之(31)の四名も登頂に成功、隊長の桑原信夫(45)を除く隊員八名が初登頂に成功した。

▽バツラ主峰 七七八五メートル、東京都庁山岳部
南面のバルタール氷河から挑んでいたが、七月六日に六〇〇メートル付近で雪崩にあい、一名が

ガ ル ワ ー ル 通 信

日本山岳会ガルワール登山隊長

原 真

*カプユラ村にて(一九七七・九・二五)
キャンプ第一日目が明けようとしています。朝4時。東部ガルワール、カプユラ村。満天の星空。モンスーンは昨日、本日に明けたらしい。羽田からボンベ、デリーと飛行機を乗りついで。あとはバスにゆられて12時間、アルモラ村へつき、ニールセンタ・ホテルについたのが一昨夜十時。いい避暑地でした。昨日はまたバスにゆられて5時間。ネパールあたりなら

ら本当は歩いている場所を、ここガルワールでは舗装道路をバスにゆられ、ヒマラヤとも思えない美しい緑の山間を谷川にそって進みます。聞いていたようにガルワールは美しい。私の経験したヒマラヤとはちょっと違う。アルプス的である。なだらかな山波と広い谷。稲の取り入れが始まっている。万事は大体予定通り。一年間精密に準備してきた甲斐があったというものです。先発の伊丹、上島と合流、全員34名がここカプユラ

死亡したので登山を打ち切った。河野慎一隊長以下十一名の登山隊

▽K7 六九三五メートル、亜細亜大学隊

石川佑隊長以下十名は、六三三〇メートルで登頂を断念した。

K7は一九七六年に福岡GCC同人隊によって試みられたが、この時は登頂ルートが発見できず戻っており、今回は付近の地形の解明とともに、一日も早い報告が待たれるところである。特にこのK7山域は現在のカラコルムの中にあって未知の部分が多く残っており、数多い日本隊の手による解明が急がれる山域である。

村に設営。いよいよキャラバンを開始します。

*ナインタールにて(一九七七・一〇・一二)

昨日キャラバンを終り、今日はバスでニューデリーへ帰る途上、ナインタールなる湖畔の町に泊ったところだ。明日ニューデリー泊り、明後日は東京へ着く予定。昨日ナンダコットを見ながらダクリ峠を越えました。ガルワールの谷にはもう秋がやってきています。下山しながらみんなよくしゃべり、笑いがとまりません。

初心者をつれて実質6日以内に六〇〇〇メートル峰を落す計画は完全に成功しました。サルコット(六一〇〇メートル)へ挑んだ26人中24人が登頂しました。2人病気のため中止。いずれにせよ登頂率は90%をこしていますから、これで私たちの計画は達成されたといつてよいでしょう。日本を出て日本へ帰るまで3週間。六〇〇〇メートル峰なるものはその程度の期間で登ってあたり前だということとを初心者で証明したことには、多少なりとも意味があると考えています。とはいえ、サルコットもヒマラヤの一峰です。決して馬鹿でも登れる山というわけではありません。今回講師をやってくれた伊藤、伊丹、上島らの活躍と指導が大きく物をいったと思います。

この山は思ったより稜線が長く、四〇五〇〇メートルにやや

面倒なセラック帯がありました。まず伊丹と上島の二人が一回のビバークを入れて二日間で頂上までのルートを拓きました。彼らは経験者なので高所順化訓練抜きで本日のラッシュ・タクトイックで

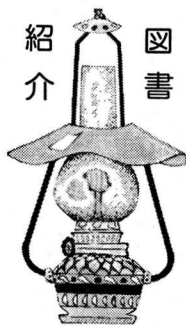
した。一般の隊員はC1(五一〇〇メートル)をもうけて、三回にわけて登頂しました。なかにはC1を使わず一気に頂上を往復したのもおられます。

最後に伊藤が、充分な順応活動をしたあと単身、ABCから一五〇〇メートルをわずか五時間で登頂し、フィナーレとなりました。こうして、かわいそうなサルコットは考えうるありとあらゆる型の攻撃にさらされ、わが軍門に下ったというわけです。聞くところによると、昨年サルコットを訪れたある隊は45日かけてこの山を登れなかったそうです。

それにしても一年間にわたる精密な計画と、講師をやってくれた三君の自信と熱意と、山に入ってから経験者としての実行力とが、真の成功の秘訣でした。つまるところ私はまことにいい仲間にめぐまれたことになりました。

例によって、この遠征には医学研究班が付きましました。この成果もまた大きいはずだ。なんとといっても、もう15年来的医学研究ですから、そろそろわかりやすい高所医学論が出来る段階にきています。(以上・田村俊介氏宛)

図 書



紹 介

登山の技術 (上・下巻)

日本山岳会編

日本山岳会で編集し『登山技術』としてやはり白水社から三巻本を出版したのは十六年前の昭和四十六年のことであった。大変好評で何度も版は重ねたが、内容の改訂は一度もされなかった。この十六年内における登山技術、用具の進歩は、本当に眼をむくほどのもので、すでに十六年前の技術書では役に立たなくなつた。

そこで昭和五十一年の春、編集委員会がまた発足し、改訂版ではなく、全く新しい角度から中級者向けの技術書を発行することになり、出来たのが今回の『登山の技術』上・下二巻本である。執筆者はいずれも本会会員の第一線メンバーにお願ひし、内容について何度も検討を重ねた。従来から一般に出されている技術書と異なるものは、内容を登山技術自体に焦点を合わせ、地理、気象、装備、医療などの項目は特に独立させず、そ

れぞれ関連のある技術の中に含めて書かれてあることで、同様な意味で登山の危険という項目も別項として取りあつかっていない。

主な目次は次の通りである。

△上巻▽序論(金坂一郎)、リーダーシップ(宮下秀樹)、トレーニング(浜野芳生)、山歩き(川上隆、食糧(神崎忠男、岩登り技術(湯浅道男・堀田弘司)、確保理論(金坂一郎)。

△下巻▽積雪期登山(野村哲也)、氷雪技術(湯浅道男・堀田弘司)、山スキー(柳沢昭夫)、露営(松永敏郎、雪崩(金坂一郎)、高所登山入門(宮下秀樹)、登山技術の変遷(山崎安治)。

上巻三八一ページ、一九七七年六月発行、下巻三八六ページ、一九七七年七月発行、いずれも定価二千円、白水社刊。

(山崎安治)

ナンダ・デヴィ縦走

日本山岳会
ナンダ・デヴィ縦走隊

「百聞は一見に如かず」とでも言おうか、じつに見事に「ナンダ・デヴィ縦走」を再現している。縦走を成功させ、意気揚々とルームに帰ってきた隊員諸氏から、

何百回となく登山の模様を根掘り葉掘り聞き出し、さらに、同年の秋ナンダ・デヴィの西北方約二〇キロに位置するドゥナギリの頂よりこの目で真近に、その美しい双耳峰を眺め、その上で想像してきた「ナンダ・デヴィ縦走」が、この書を一見すると、いかに焦点のボケたものであるかを思い知らされてしまった。

その因は、一六四葉にも及ぶ写真をもふんだんに用いての、読む人の視覚に鮮明に印象づける登山隊の経過の説明(計画と準備)、「ベースキャンプへの道」、「登攀開始」、「縦走へ向けて」、「ナンダ・デヴィ縦走」、「登山を終えて」。鹿野隊長による要領よく、簡潔にまとめられた「隊としてのまとめ」。隊員・本部員の街うことなく、率直な想いを述べた「隊員・本部員の感想」に依るものと思う。

ここで「ナンダ・デヴィ縦走」の概要を本書の隊員のイキキとした文章の中からつかんでみよう。

渡辺総隊長は「ナンダ・デヴィ縦走」の計画の特色(独自性)を「幻のナンダ・デヴィ縦走」の中でいみじくも、「私は、この計画はつぎの三つの点で注目してよい計画であると考えた。その一つはJACの若い会員達が、ルーム的集いの中から育んできた計画と思われること。その二は日本として

はじめての外国人との合同登山であること、そして第三に、ヒマラヤのジャイアンツ級の初縦走計画であることである。この三点は私にとってはなほ魅力的であった」と述べている。

そして、その計画は行動に移される。

「それにつけても、はじめてここを突破したシプトンとティルマンの執念と底力には、半ば感嘆し、半ば呆れる思いであった。ルートファインディングの見事さや、ルート自体の困難さもさることながら、ここを通ろうと考えつき、そして実行してしまふ意志の強靱さになによりも圧倒される」と先蹤者に想いを馳せながらの、リシ・ガンガの苦難のキャラバンを経て、ナンダ・デヴィ・サンクチュアリにベースキャンプを設けていく。

東峰南稜、主峰南稜へ向かって登山活動をくりひろげ、六月十三日、ついに初縦走(東峰より西峰への)が成された。高見縦走隊員は「ナンダ・デヴィの縦走をふりかえって」の中で「それにしてもここは何という所だろう。奥穂高とジャンダルムの間にある雪稜のようなものかな。いやいや、あんなものではあるまい。晴れていれば、何千メートルも切れ落ちた北壁に足がすくみ動けなくなる。しかし、きつと写真うつりに

あけましておめでとうございます

本年も、茗溪堂お茶の水店三階「山の本」の売場では、一般山岳図書をはじめ海外遠征の記録や報告書類、東京以外で発行されたものなど市広く集めるよう努力致します。尚、新しく入荷したもの、好評のものなどは、引き続きこの欄を利用して戴き、ご案内申し上げます。どうぞよろしくご愛顧下さい。

昭和五十三年一月

お茶の水駅前

茗溪堂

営業時間平日・午前10時30分より午後8時 日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

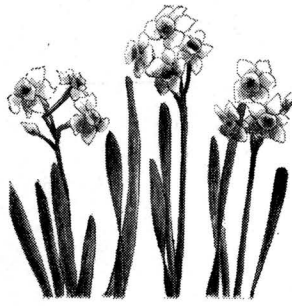
ろう……。ホットしたその瞬間スキが生じたのであろうか。四、五歩進んだ所が雪庇の上であることに気付く、あわてて引き返す。方向を誤ったのである。危い、危い」と、「ナンダ・デヴィ縦走」をイキキと綴っている。また、同隊員は、同文の冒頭で、「40年と昔に登頂された東西両峰。そして、25年も前に試みられた縦走計画であるが、それを今日のようない経験の積み重ねにより進歩した登山理論、当時に比べ格段に改良された装備を以てしても、結構、骨のある登山になったのである」とわが国最精鋭のマウンテニアーズである同隊員は「ナンダ・デヴィ縦走」をまとめている。

そして、合同登山に関しては、関ドクターが「ナンダ・デヴィの思い出」の中で、「こう云った便宜的な損得は別にして、インドとの合同は結局大成功だったといえる。私のもつていた偏った先入観はインド隊員と現実面接して、全く一新されてしまった。それまで全く未知だった外国人同志が文字通り額をつき合わせて、何日も何日も、時には対立しながら、共通の目的に向かって行動するという機会は、めったにあるものではないだろう。日本人の良き印象、悪き印象、ともに彼等の心の中に必ず残ったことだろう……。」

運悪く縦走に加われなかったが、彼だけは縦走にいかせたかった

つ葛藤しながら、共通の目標を遂行した隊であったことが、彼らと同時代に生きる登山者として何よりも嬉しく思う。

ただ「ナンダ・デヴィ隊」の隊構成が、鹿野隊長が「隊としてのまとめ」の中で述べているように「縦走隊員はいうまでもなくとりわけ強い体力、精神力と豊富な経験をもったメンバーでなければならぬが、全隊員が必ずしも縦走要員である必要はない。ただ、少



たと日本隊員が言いたくなるような彼もいた。雪におしつぶされうになった狭いテントの中で、彼はインドの神々を語り、タゴールの唱い、私は母にももらったお守りの説明をした夜のことを決して忘れないだろう」と述べている。

ここに、「ナンダ・デヴィ隊」は、意欲的な山行の意欲的な報告書を上梓した。

私は、何よりもナンダ・デヴィ隊が、性格、経歴の異なる個人個人が、お互いの個性を尊重し、か

ありがとうございました

ルーム基金応募者

ご芳名(6)

(昭和52年12月10日現在 敬称略・順不同)

【東京の部】一口二万円 数字は口数
(6) 春田俊郎(5) 川森左智子、関根吉郎、田中薫、芳野満彦、今井嘉道、竹田寛次(4) 高所登山委員会(3) 川上隆、田辺寿、木下是雄、皆川完一、飯田隆治郎、中島伊平、川喜田二郎、浅田治男(2) 川上忠義、相沢莊一、菊地文雄、今村千秋、沼倉寛二郎、中島信一、進藤波男、小林重吉、貝森健治、山岸猛男、長嶋正浩、鈴木嶋夫、今井雄

集会「写真講習会」参加記

松丸秀夫

集会委員会の活躍によって好企画が続いているが、「山岳写真講習会」は白簾史朗氏を講師にお願いして三回行われた。

第一回は座学で、五十二年十月二十五日ルームで催された。参加二十六名、あふれるような盛会であった。

先生は南アルプスの写真には全く詳しい。「夜叉神峠で山はこうなっています」と黒板に絵を画いて、「三五ミリのレンズではこうなる。五〇ミリではこう、縦位置

ではこう。一三五ミリではこうなる。カメラマツが三本写るから右の一本の処理に注意しなさい」と云う具合である。

「カメラブレは絶体にいけません。カラネガでは露出を二倍かせきなさい。同ボジでは三倍かせきなさい。でないと六切以上に伸したときにシャドウが茶色っぽくなる。」

「セレンの単独露光計を使いなさい。シーディーエスは寒い所で感度が落ちる。EEカメラもシー

二、今井喜美子、森宏子、吉川尚郎(1.2) 遠藤登(1) 秋田しおみ、川村博通、佐々木誠、淵博美、松沢憲夫、内田耕作、柴田初子、石田稔郎、菅見愛子、本田卯太郎、渡辺武男、大山光一、小原和晴、水沼数馬、岡村治信、内田良平、能勢建夫、鈴木雄二、鳥見迅彦、近藤保人、岩崎三郎、川越孝次、女子登攀クラブ、大谷映芳、佐藤佳年、三浦一郎、桐生恒治、倉知敬、工藤紗千子、森田忠志、三枝守維、新堀春喜、岡茂雄、星野重、前田泰三、杉並区役所山岳部、千島兼一、大島雄一、堀江節子、市川憲子、小田竹志、小島隼太郎、牧野菊生、芳野赴夫、村井龍一、福島健一、井上公利、渡辺誠司、梨羽時春、滝越之、柳沢宏、高橋聡、渡

辺洋子、金沢守泰、山本聖二、鈴木淳平、中沢真二、岩淵泰郎、井上博、渡辺義雄、森田忠志、徳求登喜雄、荻野和夫、木村俊博、中西豊和、山川三千雄、鈴木宏、坂本幹、鶴岡元之助(追加)(0.5) 田中弘士、松尾良文、篠崎長滋

小計 一〇五名 一六七・七口
金一、六七七、〇〇〇円
累計 金二〇、三五四、〇〇〇円

【地方の部】一口五千元 数字は口数
(20) 後藤幹次(10) 小谷隆一、大沢伊三郎(6) 伊達篤郎、湯浅道男、森信昭二(5) 村尾統一(4) 増永純男、松井辰弥(2) 小方全弘、上條岳人、百瀬一茂、近藤育代、上條輝夫、河西弥一、小森恵己

子、田辺幸雄、蔡礼樂、大沢宣彦、山口政一、高木荷爾、安藤久男(1) 岩崎忠昭、三木亮、荒尾宏、馬場猛、岩田新治、山下嘉彦、河西俊郎、吉田元、岸邦紀、村上寺、西牧康、浅輪幸久、中島忠、秋山宏明、佐々木徳次郎、斎藤音蔵、早川渥、八木原博子、橋本誠二、佐野博、小野龍弥(0.4) 小泉直隆、白木正俊、久保田宣夫、下平研一

小計 四七名 一一九・六口
金五九八、〇〇〇円
累計 五、一二六、五〇〇円

今回の合計 二、二七五、〇〇〇円
累計 金一五、四八〇、五〇〇円
申込人員 東京 五二一名
地方 四四〇名

ディーエスです」等々。

素人の話とは、まるで違う講話であった。

第二回の現地指導会は五十二年十月三十日夜中零時、バスで新宿発、夜叉神トネルの手前の駐車場まで行く。

五時登りかかり、五時五〇分峠着。明けたばかりの山は霧に包まれて何も見えない。でも先生は落着いて「気圧配置はこうだから霧は晴れるでしょう」とのこと。

集ったメンバーは普段の会合とは異なり、善男善女ばかり。母親を連れて来た孝行息子や、小学生の子供を四人連れて来た律義者などが居てなごやかだが、写真にはなかなかのガンバリようである。



批評会で優秀作品に選ばれた入沢郁夫氏の写真
(原画はカラー)

ます。」と先生は仰言る。

十二時、峠の西側に下る。迎えのバスで桃の木温泉へ。小休止のうへまたバスに乗って新宿へ。

第三回は現地指導会での作品批評会で五十二年十一月十五日ルームで行われた。大きく伸した作品が数多く出されたが先生の目は厳しく、僅かでもカメラブレがあつてはダメ。そして主題に奥行きがあれば全部にピン트가合っていないければダメ。目的の構成要素以外のものが写し込まれていてはダメと大変厳しい。だが白旗先生は静かに淡々と云われる。

カメラを四台ぶら下げた御老体や、貴婦人のカメラ、ライツミナルタCLとスーパーセミコンタをバッグに入れた御婦人。月面飛行士のハッセルブラッド五〇〇CMと報道カメラマンのニコンFをぶら下げた女性などタダの人々ではない。

マナスル以来日本山岳会の伝統であつた調節機構をセロテープで固定する方式はようやく昨日のものになったようである。

先生の予報のように間もなく霧は頂きから晴れて来たが、残念ながら白根三山に雪はない。「今年には雪がありませんから霧を生かして撮影して下さい。」あの沢の影は二時間経つとクッキリ浮き上り

そして会員のカメラを借りて先生が一枚撮られた作品が会員の作品と比べられた。なるほど先生の作はカラマツの梢が稜線からほんの少し出ているだけで、これが山の高度感を強調している。どの会員の作品もカラマツには苦勞しているようだった。

自然保護情報



山は山でもゴミの山

—山のゴミ公害について—

坂倉 登喜子

ばよいかを、本腰に考えなければいけない時がきたのではあるまいか。

私は戦後各地の山々を歩き続け、日本の自然が年々破壊されてゆく姿を見守ってきた一人だが、昔の山は人もゴミも少なく静かであつた。今のように山を汚したのは人間なのだから、美しくするのも人間ができない筈がないと思ひ、各地のゴミ公害を見聞してきた。

ここに各地のゴミ情報を一部伝えて見よう。

*北アルプス鏡平の谷間はゴミ捨て場になっていて、下から悪臭のガスが発生して、水を汲みにゆくのとはまらないということだ。天下の秘境の植物が枯れるかと心配である。

*西穂登山道水場近くの谷間は空罐で埋まっていた。ヘリコプターで回収できない場所は、積り積ってだんだん罐の谷が深くなる。

*奥又白池付近はクライマーのあこがれのテント場だが、テントの高さほどのゴミの山と雑居、池の中にゴミが浮き、そのまわりは至るところキジ場で、歩けないほどだ。クライマーの人格

を疑わずにいられない。

*平ガ岳は秘峰として人もゴミも少ない山だったのに、二度目に登った時は山頂にゴミ穴が掘ってあつた。途中の水場もゴミにハエやアブが飛んでいて食事できないほど。下の小屋で聞いた山開きに清掃した翌日なのにと、新しいゴミに驚いていた。

*巻機山登山口にゴミ籠が置いてあつた。現在あるかどうか知らないが、ここは車で来た人が登山後ゴミを捨てるらしい。車なら軽いから持ち帰れるのに……ゴミがあふれていた。登山者はどうしているのだろうか。

*上越上野原高原入口で登山者から入山料をとっていた。山菜採りの採集券と書いてあつた。季節外れに登山者からとるのはおかしいと、聞いて見たら、登山者はたばこを捨てて火事を起こしたり、ゴミを捨てたりするから、その清掃料だと云われた。

*奥武蔵鳥首峠はかたくりの花の群落で有名な峠だったのに、ゴミのため花があまり見られなくなってしまった。可愛そうである。

*西沢溪谷は人がたくさん行くのにゴミがない。山小屋の若者たちの努力とか。奇麗な所に捨てない心理が、スイスの山にあつた。

さて今後山のゴミが放置される

とその公害で、動植物異変が起り、山は禿山となつて、ついには自然破壊に大きく拡がってゆくだろう。その防止策として、清掃以前の行動に対して、大きな団体や

報告とお知らせ

K2登頂報告会

日時 2月18日(土)午後6時30分より
場所 日本山岳会新ルーム
報告者 広島三朗

一九七七年夏、二十三年ぶりにK2の登頂に成功した日本隊の報告会です。多数ご参加ください。
(高所登山・集委員会)

第六回 山岳史懇談会

テーマ 「一九二〇年代のアルプス」
講師 各務良幸氏
日時 3月16日(木)午後6時30分

場所 本会ルーム
講師にお願ひしました各務氏はケンブリッジ大学留学中F.S.S.スマイスとも交友があり、ヨーロッパ・アルプスの登攀に情熱を注がれ、たいへん活躍された方です。

今回の山岳史懇談会は、一九二〇年代のヨーロッパ・アルプスを中心にお話を伺う予定です。ご期待ください。
(図書委員会)

第二十一回 登山技術講習会

昨年、初冬の富士山にて講習会を計画し、雪不足のため中止した積雪期登山の講習会を、再度、春期富士山にて行ないます。

これから本格的な登山を志す初・中級の方を対象にして、積雪期登山の基礎、露営より氷雪登山技術までの講習を行ないます。

参加者の山歴や希望に従って、三・五人の班編成をし、ヒマラヤ等、海外登山経験者をリーダーに配置し、技術指導を行ないます。

要項は下記の通りです。本格的登山の指導と懇親の意味を含めての講習会ですので男女を問わず多数ご参加いただきたく、ご案内申し上げます。なお、参加申し込みの方は、早めに山岳会事務局までご連絡下さい。

日程 4月14日(金)～16日(日)
山小屋にて2泊
場所 富士山御庭小屋付近
参加者説明会 4月6日(水)午後6時30分、本会ルーム
行程 4月14日 午前9時30分、富士吉田駅(富士急行)集合、

バスにて大石茶屋へ、馬返しを経由して御庭小屋に入る。

4月15日 富士山登頂を含む実技指導を行なう。

4月16日 午前中、実技の後山小屋に戻り、午後3時、富士吉田駅にて解散。

参加費 一人、一、〇〇〇円
(バス代、宿泊費、保険料、雑費等を含む)

申込み 原則として3名一組として申込み下さい。1名で参加の場合はその旨記入下さい。申込書は事務局にて配布します。

申込 各自記入し、3月31日までに申込み願ひます。

連絡先 〒102千代田区四番町五十四サンビュウハイツ内 日本山岳会技術指導委員会宛。

第二〇回登山技術講習会

中止のご連絡

会報第三八六号、八月二十日付でご案内申し上げました富士山の登山技術講習会は、積雪量が少なく、目的である積雪期登山技術の講習が困難なため、中止にいたしました。

ご参加の申し込みいただきました皆様方に、多大なご迷惑をおかけしましたお詫びと、中止のご連絡を申し上げます。

会務報告

11月理事会

(11月14日午後6時30分、本会ルーム)

▽出席者 西堀会長、望月、折井各副会長、宮下、高遠、小倉、中川、橋本、大森(欠)、皆川、鈴木、大森(憲)、倉知、黒石、越田、田村、牧野内、嵯峨野各理事、浜野、山崎、金坂、小原各評議員

委任 浅田理事

▽報告事項

・UIAA総会出席報告 (吉沢一郎)

・ナンダコット登山フィルム寄贈竹節作太氏より (宮下)

・関西支部主催「南極探険の講演と映画の会」(11月15日)に西堀会長出席

・ルーム募金応募状況について (望月、宮下)

・ルーム建築の進捗状況について (橋本)

・内装12月中に完了予定 引越し計画担当者

・神崎、橋本、山本(良)、高遠

・評議員会報告 (望月)

・本年度名誉会員として今西錦司、吉沢一郎氏を推薦

・臨時総会提出議案を承認

・支部長会議を12月3日に開催 (宮下)

・西堀会長の中国訪問報告 (西堀)

・会報に別記

・山日記 (皆川)

・年次晩餐会までに出来る

・高所登山 (田村)

K2、ブロードピーク登山等の講演会を来年開催 (倉知)

・山岳 12月中に出来る予定 (中川)

・集会 10月15日写真講習会、10月29日ノミの市、10月30日現地写真講習会、11月13日現地小集会、11月15日写真批評会 (鈴木)

・自然保護 10月15日～16日自然保護現地集会(裏丹沢) (鈴木)

・海外連絡 ドイツより交流登山で来年8月13日～9月2日まで来日予定 (鈴木)

・婦人 海外登山勉強会を定期的に開始 (黒石)

・学生 年報12月末出版予定 (牧野内)

・図書 10月22日第10回山岳図書交換会 12月3日「この一本展」 (越田)

・指導 3月16日山岳史懇談会 (嵯峨野)

・富士山講習会中止 (小倉)

・山研 2月17日～18日山岳スキー研究会(鹿島橋高原) (小倉)

・11月6日閉所 利用に当っては、会員個々の認識を促す (小倉)

・信濃支部30周年記念出席報告 (浜野)

・熊本支部20周年記念山行報告 (折井)

『1978年度パミール及びカフカス入山要領』

海外連絡委員会

別記のとおりソ連山岳連盟よりインフォメーション

・レターが届きましたのでご連絡します。希望団体は
ソ連国際登山キャンプに申し込み下さい。

**USSR INTERNATIONAL MOUNTAINEERING
CAMPS OF 1978
IN THE PAMIR AND THE CAUCASUS**

INFORMATION LETTER

Two international mountaineering camps "Pamir-78" and "Caucasus-78" will be available in summer, 1978, in the mountains of the Central Pamir and Caucasus;

Mountaineers who timely pay the necessary amount of money will have the opportunity to see the most beautiful mountain regions of the USSR and climb the highest summits of the Pamir and the Caucasus.

The "Pamir-78" camp works in three 30 days programs with participants arriving accordingly on July the 15th, 17th and 19th.

Program No. 1: Ascents of the Lenin Peak (7134m) and other summits of the Zaalni ridge, starting from the base camp situated at the foot of the Lenin Peak (3700m) in the Edelweisse glade of the Achik-Tash ravine.

Participants who do not have sufficient experience in highaltitude climbing will be able to receive proper training under the instruction of experienced coaches before independent ascents of 4000-6000m summits, as well as of the Lenin Peak.

Program No. 2: Ascents of the summits of the USSR Academy of Sciences' and Peter the Great's ridges (Mt. Communism 7495m, E. Korzhenevskaja 7105m, etc.) starting from the Base camp situated at the foot of the Mt. Communism in the Fortambek glade (4000m).

Program No. 3: Ascents from the southern wall of the summits of the upper reaches of the Fedchenko glacier (Revolution Peak, 6974m, Mt. 26 Commissars of Baku, 6834m, Shipka Peak, 6254m, and others over 6000m) starting from a branch of the base camp situated in the region of the Yazgulem-Dora glacier (3900m).

The cost of the "Pamir-78" tour for:

Program No. 1 — 1100 american dollars
Program No. 2 — 1300 american dollars
Program No. 3 — 1400 american dollars

Mountaineers for "Pamir-78" will be transported to branches of the base camp by helicopter.

Program No. 1 includes a 5-days trip to the Central Asia. Other programs may have excursions for additional payment of 250 amer. dollars provided the matter was agreed upon in advance.

The "Caucasus-78" camp works in two 24-days programs (20 days of which in the Caucasus) with participants arriving in Moscow accordingly on July the 1st and 25th.

The camp works in the Elbrus area. Participants will stay in a tourist hotel at the foot of the Elbrus.

Program No. 1: Ascents of summits of the Elbrus, Uzhba, Shkhelda, Chatyn, Mt. Caucasus, Djan-Tugan, Bashkara, etc. Participants who traversed both summits of the Uzhba, may be transported for the additional sum of 100 amer. dollars per person from Swanetia to the camp by helicopter.

Program No. 2: Participants are brought by helicopter to the Bezenga ravine for the period of 7-12 days to climb the summits of Shkhara, Dykh-Tau, Mizhyrguy, Koshtan-Tau, etc. Accommodation in tents in bivouac conditions.

The cost of the "Caucasus-78" tour for:

Program No. 1 — 600 amer. dollars
Program No. 2 — 800 amer. dollars

The cost of the Pamir and the Caucasus tours includes accommodation, meals, travel USSR, medical service, consultation on climbing routes, safety works, etc.

Participants should bring along for climbing personal and group equipment (warm clothes, sleeping bags, shoes, ice-axes, cooking-stoves, ropes, etc.).

The camp administration will provide groups with food and petrol for climbing.

Entries should be sent latest January the 15th, 1978 with the name of the mountaineering organization or tourist firm, name and address (postal and cable) of the group's leader, total number of the delegation and tentative objects for climbing.

Our address: USSR International mountaineering camps, Moscow-69, Skatertny per. 4. **Cables:** "Pamir" USSR Sportscommittee, Moscow.

ルーム日誌

(52年10月)

- 4日(火) 海外委員会
5日(水) 山研委員会
6日(木) 図書委員会 募金委員
会
11日(火) 理事会
12日(水) 立教O・B会
13日(木) 婦人懇談会
14日(金) 創立記念日
17日(月) 図書委員会
18日(火) 図書委員会
19日(水) 三水会 高所登山委員
会
20日(木) 雪崩研究会
22日(土) 図書交換会

25日(火) 写真勉強会
26日(水) 学生部リーダー会
27日(木) 募金委員会 遭難対策
委員会 自然保護委員会
29日(土) JACのみの市(於・
電通会館)

今月の来室者 四八六名

夫婦会員

八三二五 西 孝子(52・10・15)

物故者

二四一八 安川茂雄(52・10・23)

除籍取消

六八二七 栗原敏起(52・10・4)

*遅ればせながら新年のご挨拶を
申しあげます。本年もよろしく。

*本年も、随想、紀行、研究、詩
歌等、「山」への原稿をお待ちし
ています。投稿原稿は15字詰でお
書きくださると幸いです。勝手な
がら採否は編集委員会におまかせ
ください。また、季節、日時のズ
レなどから掲載時期に変動があり
ますので予めご諒承ください。
*各支部行事報告その他の予定稿
が移転関連など記事錯綜のため次
号以降にまわりました。ご諒承く
ださい。(編集係)

昭和五十三年一月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六〇一

利根川商事(株)さくらビル

発行所 法人 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 大森 久雄

(813)二二八六(代表)

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂

登山・スキー用具専門店

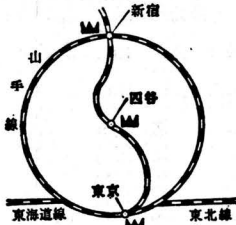
●買いやすい
山の店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番



かたるびンテイ
でんや 281-8456
中央区八重洲4の1

香山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘



東京店・中央区銀座3-5-17 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区堂島橋上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・筑崎町1-4 (28) 3440

山の新聞

近刊

年報第六号

日本山岳会学生部編

判型21cm×20cm 二七六頁

内容 ●巻頭言「大学山岳部への提言」吉阪隆正
●I・特集「大学山岳部の原点を探る」一部
滝谷/二部ナンダ・コートの初登頂/三部北
鎌尾根独標標側稜より北穂高往復/四部春の剣
岳上り西穂高へ/五部宇奈月より西穂高へ/六
部利尻岳/七部白馬岳名剣尾根/八部大
テガビンより八ッ峰
●II・学生部海外登山報告 ●III・山の講座 ●
IV・随想 ●V・加盟校積雪期山行記録一九七
〇―七五 ●VI・一九七五年度学生部活動報告
ほか

日本山岳会編

山日記 一九七八年版

A六ポケット判 定価九五〇円 山行はもとより日常の手帳としても広く愛用されています。山党同志や親しい方への洒落た贈物として喜ばれています。プレゼントカードつき。

新刊

ランタン紀行

エーデルワイス・クラブ編

七五年トレッキング記録

A五判一五八頁 定価一五〇〇円

内容 ●ランタン・ガンジャ・ラ報告 ●ランタン・ヒマール山の概要 ●ランタン・ヒマールの山々 ●報告 ●医療 ●渉外 ●装備 ●食糧 ●日程表 ●ランタン谷トレッキング日記 ●紀行 ●ホテル・エベレストビュー ●橋より美子/小さな飛行機 ●伊藤さきみ子/ルクラよりリシャンボチエ ●大久保ヒロ子/タンポチエへの道 ●坂倉登喜子 ●随想 ●三つのボカリ ●石井勝子/ネパールの一日 ●藤江幾太郎/ヒマラヤの植物 ●長岡矢枝/時計にまつわる話 ●黒石恒/ヒマラヤの銀の星 ●坂倉登喜子/二つの被写体 ●大久保ヒロ子/ヒマラヤ料理教室 ●伊藤さきみ子/ネパールの衣・食・住 ●坂倉登喜子

茗溪堂

■お求めは最寄り書店で ■出版目録送呈

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1 電話03-291-9442 振替東京8-24723